

第16章 静慮の波羅蜜 (227 ページ 18 行目～228 ページ 11 行目)

十二縁起って？私たちはずっと迷いの中にいるの？？ということについて、調べてみました。

なお十二縁起説では、いかにして苦悩が発生するかという流転縁起 (※1) の説明に重点がおかれ、苦を滅して理想に到達する還滅縁起 (※2) は消極的にしか説かれず、具体的説明はない。

還滅縁起に関する具体的な詳しい説明はむしろ四諦説 (※3) において、道諦としての八正道 (※4) によって説明されている。(「仏教要語の基礎知識」174P)

以下※部分、「仏教要語の基礎知識」より、

※1 流転縁起・・・「無明があるから行があり、行があるから識があり・・・ついには老死という苦が起こる」という過程のこと。

※2 還滅縁起・・・「無明が滅すれば行が滅し、・・・ついには老死が滅する」という過程のこと。

釈尊の成道後、梵天があらわれて、難解でも多少は理解できるものがあるであろうから説法してくださいと懇願したとされる。仏は生き方を工夫して四諦説を考案され、5人の比丘たちのために最初の説法をされた。(初転法輪)

※3 四諦説・・・迷いと悟りの両方にわたって因と果とを明らかにした四つの真理。苦諦・集諦 (じったい)・滅諦・道諦の四つ。苦諦は迷いのこの世はすべて苦であるということ。集諦はその苦の因は愛執であること。滅諦はその愛執を減することが理想の涅槃の境界であること。道諦はその涅槃にいたる因として八正道を実践修行しなければならないということ。

※4 八正道・・・仏教の基本的な八種の実践法。正見 (四諦の道理を正しく見ること)、正思惟 (正しく考えること)、正語 (正しく語ること)、正業 (正しい行いをする)、正命 (正しい生活をする)、正精進 (正しい努力をする)、正念 (正見を得る目的を念じ忘れないこと)、正定 (正しく清浄な禅定に入ること) の称

※八正道と六波羅蜜の違い・・・自己の人格形成のためには四諦や八正道の教えは十分であるが、大乘仏教ではこれに満足せずして、菩薩の修行法としては八正道を採用することなく、六波羅蜜を独自の修行法として説いた。それは八正道は自己完成のための項目だけを含んでいるから、利他のためには十分ではなく、布施や忍辱のような対社会的項目を含

んでいる六波羅蜜が菩薩の諸行法としてふさわしいとされたからである。

結局のところ、少しずつでも悪業をなさず、
地道に善業を積もう・・・と思いました

「過去生の因を知りたいければ、現在生の姿を見よ」という言葉もあるし、「未来生の果を知りたいければ、現在生の行いを見よ」という言葉もある。

(中略)

『三十七の菩薩行』に曰く、

いと堪えがたい悪趣の苦しみは 悪業の果だと牟尼は説きたまう

それゆえ命にかけても悪業を 決してなさない仏子菩薩行

まあ、そういうことじゃ。 (Gリンポチェのことば「因果」)

死は、迷妄によりこだわり、執着をもった内の煩悶が、憂いです。

憂いが生じたのを言葉に出すことが、嘆きです。

五識の聚をともなった非楽を経験することが、苦しみです。

作意をともなった意の苦しみが、悶えです。

さらに、このようなものなど随煩惱であるものそれが、悩みです。

Due to ignorance, complete attachment, and craving, death causes the inner pain called sorrow. That sorrow causes expressions in words, called lamentation. When the five consciousnesses experience unhappiness it is called suffering. Bringing that in the mind, that suffering is called “mental unhappiness.” Furthermore, in this way and so forth, the entire afflicted sub-consciousness is called “disturbed mind.”

五識 眼根・耳根・鼻根・舌根・心根の五根をより所として、色境・声境・香境・味境・触境を認知する五つの心

聚 (じゅ) あつまり むれ 蘊の意 (仏教語大辞典)

作意 たくらみの心 芸術作品の制作の意図・趣向 (広辞苑)

随煩惱 the entire afflicted sub-consciousness 俱舍宗の七十五法では、六つの大煩惱(本惑ともいう：貪・瞋・癡・慢・疑・悪見)に付随しておこる煩惱(随惑ともいう)をいう。放逸・懈怠など十九を数える。(仏教語大辞典)

ここは、「生の縁から老死と、愁・悲・苦・憂・悩が生ず」の説明。

試訳) 無明と、完全な執着と渴愛のために、死は憂いと呼ばれる内の痛みを引

き起こします。その憂いは、嘆きと呼ばれる言葉による表現を引き起こします。五識が非樂を経験するとき、それは苦しみと呼ばれます。心にそれ（苦しみ）をもたらすと、その苦しみは悶えと呼ばれます。さらに、そのような（放逸・懈怠などの）随煩惱は、悩みと呼ばれます。

それもまた〔煩惱と業と苦という〕三つの分類として知るべきです。無明と渴愛と取との三つは、煩惱です。行と有との二つは、業です。識など七つは苦です。そのようにまた〔ナーガールジュナの〕『中觀緣起（心論）』^(訳註 33)「〔緣起の〕支分の差別十二は三つの分類と知るべきです。牟尼が緣起を説かれたそれらは、煩惱と業と苦との三つに尽きて集まっている。第一（無明）と第八（渴愛）第九（取）は煩惱、第二（行）と第十（有）は業です。残りの七つ（識・名色・六処・触・受・生・老死）はまた苦です。」と説かれています。

These twelve should be understood in three groups. Ignorance, craving, and grasping comprise the afflicting emotions group. Mental formation and existence are the karma group. Consciousness and so forth, all the remaining seven, are grouped as suffering. The *Treatise on the Essence of Interdependence* says:

The twelve interdependent elements

Should be understood in three groups.

The Sage described interdependence as

Afflicting emotions, karma, and suffering.

The first, eighth, and ninth comprise the afflicting emotions.

The second and tenth, comprise karma.

The remaining seven comprise suffering.

種々の緣起説は、〈煩惱（惑）→行為（業）→苦惱（苦）〉を骨格とするが、無明を根本原因とする 12 の項目からなる緣起説（十二因緣）が次第に定着した。

(Wikipedia)

ナーガールジュナの『中觀緣起（心論）』では、緣起を「煩惱と業と苦」の 3 つを骨格として説明している。

また例えば、^(訳註 34) 無明は種子を蒔いた者のようなものです。業は田のようなものです。識は種子のようなものです。渴愛は湿りのようなものです。名と色は芽のようなものです。他は茎と葉のようなものです。もし、無明が生起していないなら、行も現れていないし、同じく生が生起していないとしたら、老死までもまた現れないが、けれども、無明が有ることから諸行が現成することになるから、生が有ることから老死までが現成することになるのです。

The examples of these are: ignorance is like on who plants the seed, karma is like the

field, consciousness is like the seed, craving is like moisture, name and form are like shoots, the other are like branches, leaves and so forth. If there were no ignorance, then mental formation could not appear. Likewise, without birth, aging and death, aging and death would not happen. But because there is ignorance, mental formations are fully created. And so forth, when there is birth, aging and death occur.”

訳註 34) 「無始の時から起こっていて、断絶せず河の流れのように起こっているが、けれども、これら四支は縁起十二支それらを包摂する因となる。四つは何かというと、すなわち無明と渴愛と業と識です。そのうち、識は種子の自性により因となる。業は田の自性により因となる。無明と渴愛は煩惱の自性により因となる。そのうち、業と煩惱は種子 [である] 識を生じさせる。そのうち業は種子 [である] 識の田の所作を為す。渴愛は種子 [である] 識を潤す。無明は識の種子を蒔く。これら縁がないなら、種子の識は現成しないでしょう。そのうち業も「私が種子の識の田の所作を為そう」とは思わない。渴愛も「私が種子の識を潤そう」とは思わない。無明も「私が種子の識を蒔こう」とは思わない。けれども、種子の識が業の田に依り、渴愛の潤いにより潤されて、無明の肥やしで注がれて、生ずるなら、生処に結生する。母胎それぞれに名色の芽が現成する。

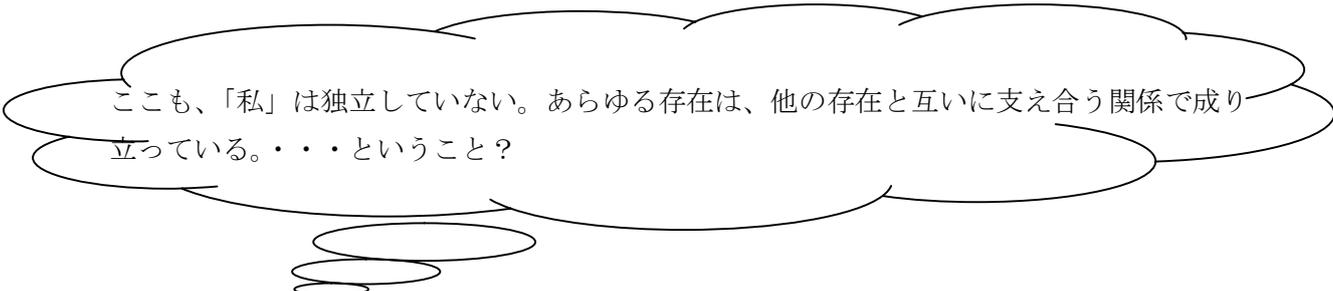
「稲芋経」では、無明から老死までのつながりを、植物で比喩的に説明。

縁起を、無明・渴愛・業・識の4つを骨格とした説明。

「私」は独立していない。あらゆる存在は、他の存在と互いに支え合う関係で成り立っている。・・・と理解しました。

そのうち^(訳註 35) 無明もまたこのように、我は諸行を現成させようとは思惟しない。諸行はこのように、我らは無明により現成させられたとも思惟しない〔その〕ことから、同じく生もまたこのように、我は老死を現成させようと思惟しない。老死もまたこのように、我は生により現成させられたと思惟しないことまで、です。けれども、無明が有ることから、諸行が現成し、生起することになるし、同じく生が有るので、老死までが現成し、生起することになることから、そのようならば、内の縁起は因を有すると見るべきです。

Ignorance does not think, “I will create mental formation,” and mental formation does not think, “I was created by ignorance. Likewise birth does not think, “I will create aging and death,” and aging and death do not think, “We were made by birth.” But when there is ignorance, then mental formations appear and manifest. Likewise when there is birth, aging and death appear and manifest. Thus, this is inner interdependence with cause.



ここも、「私」は独立していない。あらゆる存在は、他の存在と互いに支え合う関係で成り立っている。・・・ということ？

過去生は真実でない幻の姿じゃから、幻の姿について考え続けるのはやめなさい。そういうことを知らなくてもかまわないのは、それらが世俗諦であって、勝義諦ではないからじゃ。言っておくが、現在重要なことは我執を打ち砕くことであり、そうして自分の心の本性を見届けることじゃ。過去生や未来生を考えることはないし、現在生について考えることも要らないので、そんな考えにとらわれてはいけいないのじゃ。たった今の自分の心を見つめなさい。心の清浄な本来の面目を見続けるのじゃ。

菩提心と、愛の心と慈悲の心を、昼も夜も、しっかり掴み続けること、それ以外にない。本来の状態の覚醒を保って、いつも自分の心を浄化し続けることじゃ。
(Gリンポチェのことば「過去生について」)



むつかしかった